

磁器板デザインのテーマ 『洛中洛外一印象』

平安京の四条大路から^{れんめん}連綿と続く、東西の中心軸、四条通を京都の往来の中心と位置づけ、“まち歩きギャラリー”の全体テーマを『洛中洛外 - 印象』としました。

作画は、市立芸術大学 ビジュアル・デザイン研究室4回生の西谷 伶さん（2016年度卒業）が担当しました。制作は2016年春から1年の時間を要しましたが、西谷さんの若い感性が洛中洛外の景観や文物、行事や風俗等から直したモチーフや印象を再解釈し、過去と現在を融合させた38点の作品が完成しました。

この38作品では、『春・綿玉』、『夏・流れ』、『秋・煌き』、『冬・刷毛目』の穏やかな基本パターンで四季を設定し、展開させることで、全体イメージの統一感を配慮しました。さらに、月次絵の手法を借りながら、四季の移ろいの中に在る様々な京都の印象を表現しています。

磁器板の配置に関しては、絵画の色彩や画題、季節感等を優先し、往来の回遊性を促すべく飽きのこないリズムで設定を行いました。 「新京城-映画の街」や「鳥丸 / 東洞院-山鉾巡行」等、設置場所の歴史的な成り立ちや南北の通りのそここに在る拠点をひもとき、「謎かけ」的な遊び心を持たせた配置を行いました。

地上機器美装化計画への取組

「地上機器の美化化」を手がかりに、『人と公共交通優先の歩いて楽しい四条通』への実現のためにどのような提案がふさわしいのか？京都市立芸術大学 ビジュアル・デザイン研究室は、京都の魅力を若い感性で再解釈し、街の魅力を発見できる『まち歩きギャラリー』の創設が必要ではないかと結論づけました。さりげなく街を回遊したくなるような、そして、もっともっと散策したくなるような拠点づくり。磁器板への焼き付け技法で制作された、永年色褪せることのない絵画表現は、歴史と進取性が共存する京都の街並みにふさわしい、しなやかな作品となっています。

